

C. Kingsley の作品にみられる 『ジェントルマン』の概念

概念の変容過程の問題とかかわって

山 田 岳 志

Remarks on the Concept “Gentleman” in the works of C. Kingsley

with reference to the historical process of its conceptional transition

Takeshi YAMADA

The aim of this study is an attempt to make clear the development of the concept of “gentleman” in relation to its social structure in nineteenth century. It had been said that so called sportman-ship and fairplay in modern sport was influenced and was formed by the middle classes, and made the remarkable development. Namely, England was first country to industrialize and development of modern sport-formation be seemed to just a reflect of this economic change, however, this answer based on such rude economic determinism is unsatisfactory. And the important thing is change in the gentlemanly behaviour which occurred in that connection. From this point of view, the concept of “gentleman” in nineteenth century will be discussed in this paper, mainly concerning the concept of “gentleman” treated in the works of C. Kingsley.

序 論

いわゆる Sportmanship, つまり fairplay, amateurism, team-spirit (esprit de corps) 等の特性の総体こそは19世紀イギリス社会が創り出した、まさにイギリス人の人格形成の理念とも言うべきものであったろうと思われる。それは、ジョージ・オーウェルの言うならば、資本主義的倫理と貴族的倫理が写したイギリス社会、つまり中産階級の発展とかの『帝国主義』を支えたジェントルマン教育を基調とした教育制度は、そのまま近代 Sportmanship へと変容する時代でもあったと思われる。19世紀中葉において認められる第一の兆候である運動競技への崇拜²⁾、そして Mack が次のように指摘するような時代的背景、つまり

Again, the passion for game, checked somewhat in the sixties, blossomed more fully under the influence of the increased competitive spirit of the age, encouragement by the new plutocracy, and the more widespread interest in imperialism, until it assumed proportions undreamed of in the sixties.³⁾

このような時代的背景は、近代 Sportmanship の理念が問い直されてくる時代を物語るものであったろう。さて、スポーツ、体育史研究が教示するように、アスレティシズムの発展、展開や、さらには Simon が「アーノルド流の主張は運動競技の重視や、キングズリーモーリス流の『男らしさ』の理想に席をあげわたしつつあった。」⁴⁾と指摘するように、近代 Sportmanship の思想的発展が、T. アーノルドの影響を受け継いだと思われる T. Hughes や、C. Kingsley の提唱した “Muscular Christian” の原理のもとに問い直されてくるのである。1857年に出版された『Tom Brown's Schooldays』の爆発的売れ行きは、そのまま近代 Sportmanship の理念形成を物語るものであったろうし、又、H. Spencer は1858年『Physical Education』において、C. Kingsley 等の “Muscular Christian” による体育活動について評価しているのである。

Happily the matter is beginning to attract attention. The writing of Mr Kingsley indicate a reaction against over-culture; carried perhaps, as reaction usually are., somewhat too far. Occasional letters and leaders in the newspaper have

shown an awakening interest in physical training. And the formation of a school, significantly nick-named that of “muscular Christianity” implies a growing opinion that our present method of bringing up children do not sufficiently regard the welfare of the body.⁵⁾

さて、カザミアン、ヴェラミィは Kingsley を評して次のように指摘する。それは衛生上のリアリストであり⁶⁾、かつ宗教を軍人氣質に受け入れられやすいかたちで提示した人、男らしさとキリスト教とが両立しうることを提示した人であると言う⁷⁾。さらには Kingsley に集約される “Muscular Christian” 像こそは、まさにそのまま Tom Johns 的な Sportmanship から近代 Sportmanship への変容を意味するものであったと言われて⁸⁾。本論は19世紀ジェントルマン概念を追究する試みとして C. Kingsley の諸作品を手がかりとして若干の検討を試みるものであるが、それはまたこれまで追究してきた、イギリス資本主義の発展に伴って変容したと思われるジェントルマン概念、いうなれば近代 Sportmanship の理念形成の問題を設定するための大雑把な予備的試みであるとともに、19世紀イギリス文学にみられる “manliness” を対象とする研究の構成をなすための大雑把な試みでもある。本研究は史料収集の不備も考慮して今回は特に C. Kingsley 自身の言葉で描写することに留意しながら論をすすめた。史料としては、『Health and Education』(1878年)、『Alton Locke』(1983)、『農民の悶え』(大正11年)、(以上は国立国会図書館所蔵のものを使用した。)、『Westward HO』(1969年)『Letter and Memories of his life, 2vols』(1877年)を使用した。

I. Muscular Christian

T. アーノルドはパブリック・スクールの教育改革に偉大な影響を与えたと評価されたり⁹⁾、又、1850年から70年の階級秩序を強化する教育制度の先駆的思想を準備した人¹⁰⁾、またアーノルドの影響が最も大きかったのは社会的目的の復興、キリスト教徒的紳士の教育¹¹⁾にあったとも言われている。そしてこの T. アーノルドによって最も影響を受けたと言われるのが、T. Hughes, C. Kingsley であった。しかも T. Hughes の『Tom Brown’s School days』は文学においてスポーツを道徳的訓練の手段として称揚した元祖であると言われ、それは T. アーノルドの思想を強く受けた作品であると指摘されている¹²⁾。そしてこの小説において T. Hughes はこう言うのである。

I don’t care a straw for Greek particles, or the digamma : no more does his mother. What is he

sent to school for? Well, party because he wanted so to go. If he’ll only turn out a brave, helpful, truth-telling Englishman, and a gentleman, and a Christian, that’s all I want.”¹³⁾

それはまさしく子供に期待する Christian Gentleman 像を描写するものであったろう。また1861年、T. Hughes は “Muscular Christian” について次のように述べている。

whereas, so far as I know, the least of the muscular Christians has hold of the old chivalrous and Christian belief, that a mans body is given him to be trained and brought into subjection, then used for the protection of the weak, the advancement of all righteous cause, and the subduing of the earth which God has given to the Children of men.¹⁴⁾

つまり、T. Hughes は “Muscularmen” と “Muscular Christians” とは区別されるべきものであり、ただ両者に共通するところといえば、よく訓練された肉体を持つことぐらいである。“Muscular Christians” とは中世の騎士的かつキリスト教的信念を持つ人であると指摘するのである。

さて、T. Hughes の “Muscular Christians” が既述したような内容のものであれば、C. Kingsley が言う “Muscular Christians” とはどのようなものであったろうか。1865年、C. Kingsley は『David』というテーマのもとで “Muscular Christians” について言及するのである。

Its first and better meaning may be simply a healthful and manful Christianity; one which does not exalt the feminine virtues to the exclusion of the masculine.¹⁵⁾

このように C. Kingsley は “Muscular Christian” の概念について説明しながら、そのなかで “Masculine” については歴史的な説明を展開していくのである。それは中世において無防備であったキリスト教徒は迫害を受けてきたが、しかしそのような時代であったにもかかわらず gentleness, patience, resignation, self-sacrifice, self-devotion といった諸徳を身につけた。しかもこれらのすべては女性的徳であったが、これらの諸徳をより高尚な理念へと形成していったのが騎士道であったというのである。

The warriors of the Middle Ages hoped that they might be able to serve God in the world-even in the battle-field; at least the world and the battle-field they would not relinquish, but make the best of them. And among them arose a new and a very

fair ideal of manhood; that of “the gentle, very perfect knight,”¹⁶⁾

“A higher ideal, I say, was chivalry, with all its short comings. And for this reason; that it asserted the possibility of consecrating the whole manhood, and not merely a few faculties there of, to God;”¹⁷⁾

このように Kingsley は “Muscular Christian” を騎士道的資質に求めたのである。また Kingsley の諸作品の中でもとりわけクリミア戦争を意識して書かれたといわれる『Westward HO』の主人公, Amyas Leigh もまた “Muscular Christian” として描写されているのである。このように Kingsley の “Muscular Christian” はイギリス帝国主義の精神的支柱ともなるべき要素を具えていたとも言えよう。Minchin は “Muscular Christian” についてこう指摘する。「もしわれわれの筋肉的キリスト教が何をしたかと訪ねられるなら, われわれはイギリス帝国を示めたい。わが帝国は断じて観念論者や論理学者のいう国家によって作りあげられたのではない。」¹⁸⁾と。C. Kingsley の騎士道的資質を具えた “Muscular Christian” はその男らしさについて『Heroism』においてさらに言及していくのである。

II. 『Heroism』と manliness

R. Gilmour が指摘するところによれば, イギリス19世紀中葉のジェントルマン概念の変容過程において, “Gentleness” と “manliness” とは同等に強調されたという¹⁹⁾。1872年, C. Kingsley はチェスターでの講演で『Heroism』について言及し, こう言うのである。「ヒーローとは神のような男であろう」²⁰⁾と。T. アーノルドが騎士道的精神を害悪視したのに対して, C. Kingsley のいうヒーローは, 時代の精神に捕えられた拜金熱に浮かされて金持ちになることにあくせくする²¹⁾, このような時代的批判精神となるような騎士道理念を復活させるのである。

they ennobled the heart of Europe in the fifteenth century, at the re-discovery of Greek literature. So far from contradicting the Christian ideal, they harmonised with—I had almost said they supplemented—that more tender and saintly ideal of heroism which had sprung up during the earlier Middle-Ages. They justified, and actually gave a new life to, the old noblenesses of chivalry, which had grown up in the later Middle Ages as a necessary supplement of active and manly virtue to the passive and feminine virtue the

cloister. They inspired, mingling with these two other elements, a literature, both in England, France and Italy, in which the three elements, the saintly, the chivalous, and the Greek heroic, have become one and undistinguishable, because all three are human, and all three divine.²²⁾

このように C. Kingsley は『Heroism』において, 古代ギリシャの英雄に真の “manliness” を見出すのである。そして何よりも C. Kingsley が主張する『Heroism』は自己犠牲と, 社会奉仕の精神を強調するのである。カザミアンは C. Kingsley のこのような主張に対して, 人間同胞という古来の思想や社会奉仕という新精神というものが協同主義者達が固く信じている信仰であったと指摘するのである²³⁾。

And it is of the essence of self-sacrifice, and therefore, of heroism, that it should be voluntary: a work of supererogation, at least towards society and man: an act to which the hero or heroine is not bound by duty, but which is above thought not against duty. Nay on the strength of that same elements of self-sacrifice.²⁴⁾

C. Kingsley や T. Hughes にみられる自己犠牲の主張は T. アーノルドの “Christian Gentleman” 像にみられる思想に連がるものであった。そして彼等の主張する自己犠牲, 社会奉仕といった『Heroism』の資質的条件は中世騎士道の理念としての “manliness” を強調するものであった。そして C. Kingsley はスポーツ活動にその陶冶の場を見出ししていくのである。

III. “Muscular Christian” とスポーツ

M. Tozer によれば, 19世紀イギリスにおいて “Muscular Christian” は団体精神 (Esprit de Corps) を内に秘めた存在としてその価値が認められつつあったと指摘する²⁵⁾。そして T. Hughes の『Tom Brown's School-day』はまさに近代 Sportmanship としての団体精神というカテゴリー先駆的思想をなすものであったと言われている²⁶⁾。それはヴィクトリア朝時代を代表する産業ブルジョアジーが求めた「競争」とか「集団」, 「男らしさ」といったモラルと合致するものであったと思われるし, 一方では自己犠牲, 社会奉仕といったモラルはイギリス帝国を支えるモラルと合致したと思われる。さて, カザミアンは C. Kingsley をして, 彼の重要な関心事が魂の衛生と肉体の衛生にあったことを指摘している²⁷⁾。事実, C. Kingsley がスポーツに対して描写している箇所が彼の諸作品に多く散在するのである。ここでは C. Kingsley が描く “Muscular Christian” がスポーツに対して

どのように考えたかを彼の諸作品の中から描写してみる。「野外の運動が貴殿にとって何等の効果なしとあるは、恐らく貴殿の心身構造が普通人の構造と異なるが為に非ざる哉。拙者の観察する所に依れば、健なる筋肉、神経の興奮性、脳力の権衡は人を造るものに御座候。若し然らざれば生理学は無意味なるものと相成るべく候。」²⁹⁾ Lancelot は従兄の牧師 Luke にあてた手紙の中でイギリスの伝統的スポーツを称賛するのである。そして、Alton においてすらスポーツについてこう描写しているのである。

I confess, in spite of all my class prejudices against 'game-preserving aristocrats; I almost envied the man; at least I seemed to understand a little of the universally attractive charms which those same outwardly contemptible fresh running brooks: the exercise, the simple freedom, the excitement just sufficient to keep alive expectation and banish thought,²⁹⁾

しかしながら、“Muscular Christian” が伝統的スポーツに対して理解を示めず反面、実際は19世紀中葉のイギリスの田園生活は Lancelot の期待を裏切るような状況であったし、又 Alton の住む都市生活も市民にとってはスポーツを楽しむような状況ではなかった。C. Kingsley にとって、このような19世紀中葉のイギリスの状況に対して肉体の復権を求めるのである。そしてそれは C. Kingsley の場合、帝国主義の精神と合致した思想としてイギリス社会に受け入れられていったと思われる。そして、“Muscular Christian” がスポーツに何を期待していたかがよく表現されているように思われるところを示せばこうである。

It was a noble sport——a sight such as could only be seen in England——some hundred of young men, who might, if they had chosen been lounging effeminately about the streets, subjecting themselves voluntarily to that intense exertion, for the mere pleasure of toil. The true English stuff came out there; I felt that, in spite of all my prejudices——the stuff which has held Gibraltar and conquered at Waterloo——which has created a Birmingham and a Manchester, and colonised every quarter of the globe——that grim, earnest, stubborn energy, which, since the days of the old Romans, the English possess alone of all the nations of the earth. I was as proud of the gallant young fellows, as if they had been my brothers——of their courage and endurance (for one

could see that it was no child's-play, from the pale faces, and panting lips), thier strength and activity, so fierce and tet so cultivated, smooth, harmonious as oar kept time with oar, and every back rose and fell in concert——and felt my soul stirred up to a sort of sweet madness, not merely by the shouts and cheers of the mob around me, but by the loud, fierce pulse of the rowlocks, the swift whispering rush of the long, snakelike eight oars, the swirl and gurgle of the water in their wake, the grim, breathless silence of the straining rowers. My blood boiled over, and fierce tears swelled into my eyes; for I, too, was a man, and an Englishman;³⁰⁾

『Yeast』の主人公、Lancelot は乗馬を好むスポーツマン、つまりジェントルマンである。その Lancelot にとってスポーツは階級を越えて実践されるべきであると言わせしめた。又『Alton Locke』の Alton はチャーチストでありながらもスポーツに対しては階級を越えて同胞愛的、民族愛的意識を示めしながら共感を覚えていくのである。この両者のスポーツに対する態度は、カザミアンが指摘するように、C. Kingsley にとっても、否キリスト教社会主義者達にとっても革命を越える傾向はなかったし、貴族的政治を評価し、王政復古を念願としていたことから³¹⁾、それはむしろ19世紀イギリス社会が期待していた人物像を提供したと思われるし、“Muscular Christian” という宗教もそのような状況と合致するものであったろうと思われる。C. Kingsley の “Muscular Christian” は自己犠牲、社会奉仕の精神の資質を陶冶する場をスポーツ（チーム・スポーツ）に求めている。

Moreover, they know well that games conduce, not merely to physical, but to moral health; that in the playing-field boys acquire virtues which no books can give them; not merely daring and endurance, but, better still, temper, self-restraint, fairness, honour, unenvios approbation of another's success, and all that “give and take” of life which stand a man in such good stead when he goes forth into the world, and without, which, indeed, his success is always maimed and partial.³²⁾

暫定的結語

19世紀ジェントルマン概念について C. Kingsley の諸作品を中心としてその大雑把な追究を試みてきた。近代 Sportmanship の概念を思想的に把握しようと試みると

き, T. Hughes や C. Kingsley の指摘する“Muscular Christian”は通りすがせない位置を占めていると思われる。ましてイギリス近代スポーツを思想的に把握しようと試みる時, それを伝統的ジェントルマンの価値体系と中産階級の価値体系との発展過程としてとらえるならばなおさらであろうと思われる。C. Kingsley による“Muscular Christian”が階級を越えてスポーツ活動を主張しても, C. Kingsley 自身イギリスの階級制度を改革するようなことを夢みているわけではなかったし, 肉体的, 精神的にも階級の特権を維持する立場からすれば, C. Kingsley が描写する“Muscular Christian”も時代的条件を満たすような資質としての, 騎士道の精神を備えるジェントルマン像にほかならなかったと思われる。

引用・参考文献

- 1) 河合秀和訳『ジョージ・オーウェル』p.64, 岩波書店, 1983.
- 2) 成田克矢訳『イギリス教育史』, I. p.384, 亜紀書房, 1977.
- 3) E. C. Mack. “Public School and British Opinion Since 1860”, p.123. Greenwood Press. 1971.
- 4) 前掲書. p.114.
- 5) H. Spencer. “Education, intellectual, moral, and physical” p.177, Watts & Co. 1949.
- 6) 石田憲次, 白田昭英訳, 『イギリスの社会小説(1830—1850)』, p.351. 研究社. S35年
- 7) 堀 経夫, 大前朔郎訳『イギリス社会思想家伝』, p.223. ミネルヴァ書房. 1983.
- 8) 阿部生雄 『筋肉のキリスト教と近代スポーツマンシップの理念形成』, p.177. 岸野雄三退宮記念論文集, 本研究が上記の文献によって大いに示唆され, かつ教示を受けたことをここに特記しておきたい。
- 9) T. W. Bamford, “Thomas Arnold on Education” p.30 Cambridge Univ Press, 1970.
- 10) 松浦嶺考『近代イギリス史の再検討』, p.35. ミネルヴァ書房. 昭和37年
- 11) 若松繁信, 妹尾剛光, 長谷川光昭訳『長い革命』, p.125. ミネルヴァ書房. 1983.
- 12) 前掲書. p.351.
- 13) T. Hughes, “Tom Brown at Oxford” Vol. I, p.170. James R Osgood. 1871.
- 14) Edited by Mrs C. Kingsley. “Charles Kingsley, his letter and Memories of his Life”, Vol. 2, p.212. Henry S. King & Co. 1877.
- 16) ibid. p.213.
- 17) ibid. p.213.
- 18) 加藤橋夫訳『近代イギリス体育史』, p.59. ベースボール・マガジン社. 昭和54年.
- 19) Robin Gilmour, “The Ideal of the Gentleman in the Victorian Novel”. p.86. George allen & Univ Press. 1981.
- 20) C. Kingsley, “Health and Education”, p.205. Macmillan. 1882.
- 21) C. Kingsley, “Alton Locke” p.101. Oxford Univ, 1983.
- 22) 前掲書. p.207.
- 23) 前掲書. p.373.
- 24) 前掲書. p.210.
- 25) Malcolm Tozer, “From Muscular Christianity to”, Esprite de Corps” p.126-128. Stadion VII, 1. 1981.
- 26) 前掲書. p.338
- 27) 高谷実太郎訳『農民の悶え』, p.40. 早稲田大学出版部. 大正11年
- 28) 前掲書. p.119.
- 29) 前掲書. p.132.
- 30) 前掲書. p.328.
- 31) 前掲書. p.86.
- 32) 前掲書. p.105.
- 33) 前掲書. p.87.
- 34) 前掲書. p.65.

(受理 昭和61年1月25日)